



Harem
Venus

ハ ヴ ィ ム ナ ス

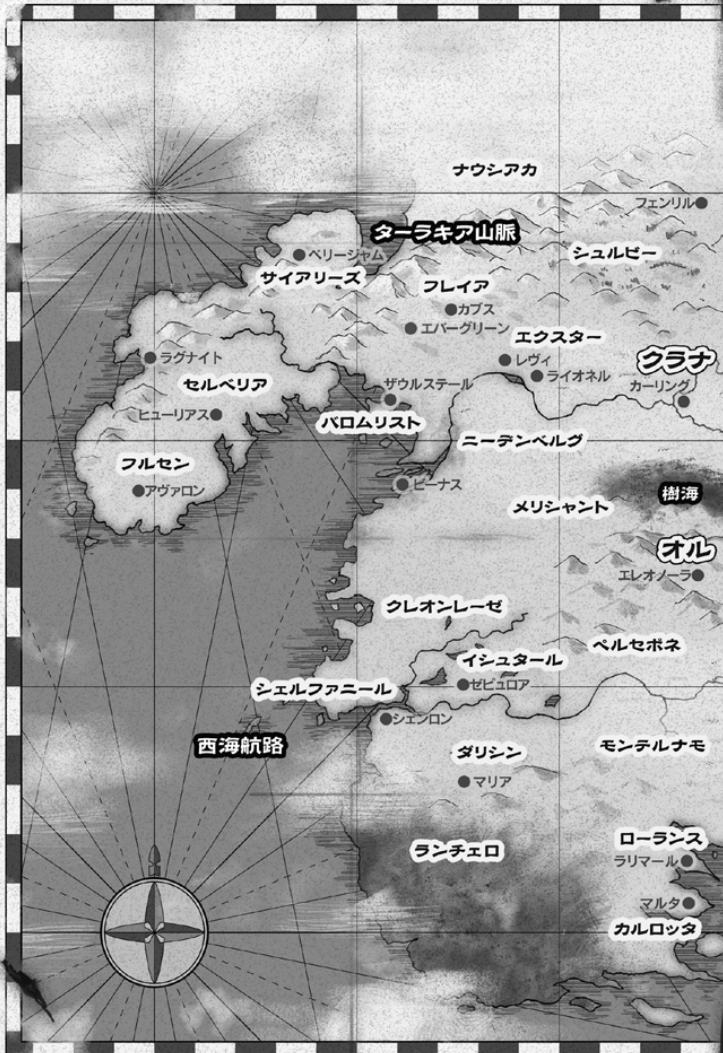
小説 竹内けん

挿絵 saxasa

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

●ベリーシャム

●カブス

●エバグリーン

エクスター

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーデンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オル

エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

シエルファニール

●ゼビュロア

●シェンロン

ダリシン

モンテルナモ

●マリア

ランチェロ

ローランス

ラリマール

マルタ

カルロッタ



登場人物紹介

Characters



サチ

健気で控えめな性格の少女。海女として磨かれた魅力的な身体をしている。

オズマ

漁村マルタで育った少年。村を挙げての海龍狩りで得た資金を元に、サチとともに都会の学園に留学する。



ヒルデガルダ

ラリマールのシースター学園に通う、貴族の家の娘。レズっ気があり、サチに目をつける。



ブリギッド

騎士を目指すシースター学園の生徒。筋肉フェチでたくましい男を好んでいる。

第一章	旅立ち
第二章	名門シースター学園
第三章	禁断の果実
第四章	甘い罠
第五章	プライベートビーチ
第六章	スッポンの生き血

上目遣いにオズマの様子を見たサチは含み笑いをしながら、小鼻をヒクヒクさせて美味しそうに逸物を啜る。

（まったく、こいつ美味そうにチンポ舐めるよな。ほんと、チンポ啜えているだけで幸せそうだ）

犬でもあやすかのようにポニーテールの頭髪を撫でてやると、サチは嬉しそうに紫色の瞳を細める。

左手で肉袋の中の二つの睾丸を揉みほぐし、右手で肉筒を扱しごきながら、口内では温かい唾液の乗った小さな舌が、龟头部全体を洗うかのように絡みついてくる。

そうやって強い刺激を与えながらも、オズマが射精しそうだな、と察するとさっと責め方を変えてくる。

（くっ、こいつもうほとんどフェラチオのプロだな）

外見的には大人しい。清純派の可憐な美少女といった顔立ちをしながら、その実、チンポ舐めるのが大好きなのだ。

どうすれば男が喜び、どうすれば射精するか、わかってしまっている。

自らの生態を知りつくしているサチに翻弄されたオズマは、やがて追い詰められ、懇願に似た声を漏らす。

「サチ、そろそろ」

「うん♪」

逸物を啜えたまま領いたサチは、尿道をストローに見立てて、睾丸から直接吸い取ろうとするかのように、尿道口を吸引してきた。

「ジュルジュルジュル……」

頬を火照らせながら、逸物を啜るサチ。その右手が下半身に降り、スカートの中に入ることを、オズマは見咎めた。

「うっ」

断末魔の呻き声を漏らして、オズマは果てた。

「ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！」

恋人の生態を知りつくしている少女は慌てず騒がず、口内ですべて受けとめる。

「ゴクリ、ゴクリ、ゴクリ。」

喉を鳴らして嚙下したサチは、尿道に残っていた最後の一滴まで絞り取ってから、逸物から口を離れた。そして、持参していたハンカチで口元を拭う。

「ふう、お粗末様でした。それじゃ、そろそろ帰ろうか？」

「ちよつと待て」

野外でこんなことをしてしまったことにさすがに気恥かしさを感じたのか、早々に場所を移動しようとするサチの腕を、オズマは捕らえた。

「な、なに!!」

戸惑うサチを、オズマは強く抱き締める。

「おまえいま、フェラチオしながら、オナニーしていたろ」

「え、なな、なんのこと？」

目を泳がせて言い訳しようとするサチの瞳を、オズマは覗き込む。

「隠したってダメだ。おまえが俺のことをよく知っているように、俺はおまえのことをよく知っている」

「わ、わたしは……」

「俺の前でまで清純派の女を演じることはねえよ。ほら、見せてみろ」

水色生地に白いフリル付きのお洒落なミニスカートをオズマがまくろうとすると、サチは両手でひしと押さえた。

「いや！」

「たくっ」

サチがスカートの前面を力いっぱい押さえてしまったので、その身体の向きを変えさせた。顔から桜の木に激突しそうになったサチは、慌てて両腕でしがみつく。その間にオズマは、スカートを後ろからめくる。

「あ、ダメえええ」

スカートの前面は完璧に押さえられても、後ろを守るのは難しい。

ぷりんつとしたお尻を包む、純白のショーツが全開となった。

オズマはその場でしゃがみ込み、ショーツの上から二つに割れた肉朶を掴んで覗き込ん

だ。

「ぐっしより濡れているな」

薄いショーツが濡れて張りつき、ピンクな中身を透けてみせている。その向こうには、ぽこつと卵でも隠しているかのような土手高の恥丘があった。

村で水着を着用していたときからわかっていたことだが、モリマンな娘である。

「それは……その……」

どう言い訳しようかとおろおろしている少女に、オズマは苦笑まじりの声をかけてやる。

「おまえがエッチな身体をしていたからって、嫌いになつたりしないから安心しろ」

「……うん」

オズマの言葉に安堵したのか、サチの身体から力が抜ける。

「考えてみればそうだよな。男に性欲があつて、女にない道理がない。おまえいつもチンポしゃぶりながら、こんなに濡らしていたのか？」

「う、うん……」

恥じ入りながらも、サチは素直に頷いた。

「ごめんな。いままで気が付いてあげられなくて」

謝罪したオズマは、白いショーツに手をかけた。

「あ、ダメ、こんなところで……」

「大丈夫、誰もこないって」

根拠もなく請け負ったオズマは、シヨーツを引きずり下ろした。

まずは小さな尻、尻の割れ目があらわとなり、

ヌラー……。

女の股間と純白シヨーツのまたぐり部分が透明な液を引きながら離れた。

（うわ、ほんと、ドロドロな。女ってこんなに濡れるものなのか？ サチのやつ、エロい身体しているじゃないか）

生唾を飲みながら、シヨーツを太腿の半ばまで下ろしたところで、オズマは我慢できずに、両手を尻に戻した。

小さく引き締まった桃尻を両手に持ち、左右に豪快に割る。

「はう……」

薄桃色をした菊華状の肛門があらわとなった。

その下を覗けば、濡れた亀裂があり、その先には初めて見るモリマン。

その健康的に膨らんだ恥丘は、ふわふわの陰毛に覆われているが、本数そのものはかなり少ない。

それが濡れ輝き、打ち上げられた海草のようにべったりと張りついている。

「いい眺めだ。おまえのここ、いつも見たいと思っただよなあ。念願かなって嬉しいぜ」

「はう、オズマにならいつでも見せてよかったんだけど、でも、やっぱり恥ずかしいよ」

桜の樹木にしがみついたサチは顔を真っ赤にさせて身を固くしている。

それをいいことにオズマのほうは、両の親指を伸ばして、肉裂を押し開いた。

トロトロトロ……。

中に溜まっていた蜜が溢れ出し、太腿の半ばで止まっていたショーツにかかる。

「へえ、これがおまえのオマ○コか。珊瑚、いやヒトデみたいだな」

「そんなところ見ちゃヤダ」

桜の樹木にしがみつくとサチは、消え入りそうな声で訴えるが、ここまできて童貞少年の暴走が止まるはずがない。

「綺麗だぜ。それに美味しそうだ。生牡蠣なまがきみたいにくペロリと丸飲みにしちみたいくらいだ」

そう嘯うそぶいたオズマは、顔を近づけていき、生牡蠣のようにヒクヒクしている陰唇に向かつて舌を伸ばし、ペロリと舐めた。

「はう♪」

桜の木にしがみついているサチはビクンと身体を震わせる。

「そこ舐めちゃダメ、汚いから……」

「汚くなんかない。おまえの身体だぞ」

オズマの言葉に、サチはイヤイヤと首を横に振るう。

「でも、わたし、今日、お風呂入ってないし……それに」

「それに？」

オズマに促されたサチは、まるで飛び降り自殺でもしそうな勢いで告白した。

「わたし、学校でトイレ行っちゃった」

その言葉に、オズマは失笑する。

「おまえだつて俺のおちんちんしゃぶりまくっていたじゃないか。おあいこだよ。おまえのおしっこぐらい、いくらだつて飲んでやるよ」

そう嘯いたオズマは、再び舌を伸ばすと、サチの陰唇の先から、会陰部を通して、さらに肛門まで舐めてやった。

「オズマ、臭くない？」

「ああ、臭くない。美味いぜ、おまえのオマ○コ」

味覚という意味では、酸っぱくてしょっぱいだけだ。しかし、味覚以外のものが、牡を滾たぎらせるのだろう。オズマは夢中になって舌を這わせた。

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ……。

腹を空かせた仔猫がミルクを飲む真摯さで、陰唇の内側を舐め穿ほじった。

「はあ……、はあ……、はあ……」

当初は羞恥に身悶えていたサチだが、次第に陰唇を舐められる気持ちよさに目覚めていったのだろう。

気持ちよさそうな喘ぎ声を、小さく漏らす。

細い両膝がプルプル震えているが、崩れ落ちないのは背後からオズマが支えているからであろう。

（へえ、これが噂のクリトリスってやつだな）

完全な包皮である。包皮越しに辛うじて勃起しているのが見て取れるが、中のものは覗いていない。

好奇心を刺激されたオズマは、包皮の上からそっと抓んでやる。

「そこダメええええ!!!」

サチが頓狂な悲鳴を上げたので、オズマは驚く。

「ここ痛いのか？」

「い、痛くはないよ。ただ、そこ痺れるというか、ビリビリするからあまり触りたくない」

「そうか……」

オズマががっかりしたような声を出したので、サチは慌てたようだ。

「あ、でも、オズマが触りたいなら、その、優しくなら触っていいよ」

「こんな感じか？」

妥協したサチの言葉を聞いて、オズマは包皮の上から、中の硬い芽を柔らかく揉んでやる。

「はう、それだと、き、気持ちいい、かも♪」

「そうか。よかった♪」

気をよくしたオズマは、右手で優しく肉芽を揉みしだきつつ、舌を伸ばし、蜜の溢れる膣孔を舐め穿った。すると舌尖に何か触れる。

（これがサチの処女膜ってやつだな）

オズマはサチに男性経験がないことを疑ってはいなかったが、じかに確認したことで一段と胸を高鳴らせた。

（これは俺の女だ！）

そんな独占欲に支配されたオズマは、舌をグリグリと回転させ、膣穴の拡張に努めながら、同時に淫核を揉み続けた。

「はう——、はう——、はう——、はううう!!!」

桜の樹木にしがみついていたサチの小柄な肢体が痙攣したと思ったら、いままで以上に大量の熱い蜜が溢れてきた。

これによりサチが絶頂したことを、オズマは悟って、クンニをやめる。

「いったのか？」

「はあ……はあ……はあ……うん、たぶん、これがイクってことだと思う……」

どうやら、男根をしゃぶるのが好きなくせに、本人は絶頂するまでオナニーしたこともなかったようである。

桜の木にしがみついているサチは恥じらいながらも、認めた。

（まったく、あの淫乱女たちに囲まれて育ったとは思えないやつだな）

奇跡的なまでに清純な娘である。

好きな女を初めて絶頂に導いたのだ。なんとも誇らしい気分になる。

勇み立ったオズマは、その場で立ち上がると、すでに再勃起を完了させていた逸物を、濡れそぼる膣孔に添えた。

「それじゃ、入れるぞ」

「え、ここ学校だよ。それに入学式の当日にこういうことをやるのは、不謹慎というか」「いまさらだろ」

嘯いたオズマはぐいと腰を押した。

ピクンとサチは腰を前に出す。

「俺はおまえとやりたい。おまえはどうなんだ？ おまえが俺のちんぽなんか欲しくないっていうなら、やめるぞ」

オズマが腰を引くと、桜の樹木に両手を添えたサチは、恨めしげに後ろを睨む。

「う——、意地悪」

恨めしげな顔をするサチに、オズマはさらに促す。

「俺はおまえのことを大事に思っているからな。おまえが嫌がることはしないよ。逆にして欲しいってことなら、なんでもしてやる」

そう嘯きながら、オズマは逸物の切っ先で、サチの濡れそぼる膣穴の入り口をグリグリと穿ってやる。

熱い蜜は止め処なく溢れ、亀頭にかかる。

ピクピクと震えていたサチは、やがて屈した。

「うん、……オズマがやりたいのなら、その……わたしはいいよ」

「よし、なら入れるからな」

サチの返事を受けて歓喜したオズマは、さっそく、ぐいっと小さな尻を両手で持って引いた。

ずぶつと亀頭部が半分ほど埋まったところで、切っ先に何かが当たる。

（このサチの処女膜を破るのは俺だ。サチは俺のもんだ。生涯大事に守ってやる！）

燃えたぎるような独占欲に胸を焦がしたオズマは、一気に押し込む。

「ひい、ひい……」

引き攀った悲鳴を上げたサチは、爪先立って逃げようとしたが、前面は樹木。上に伸び上がって逃げるにも、男のほうが腰の位置は高い。

ブツン。

（よし、突破した）

処女膜をぶち破った確かな手ごたえが、逸物から伝わってきた。

ズブ、ズブズブズブ……。

処女膜さえ突破してしまえば、あとは道なりだった。

狭くザラザラとした道を無理やり押し広げながら進んでいく。そして、最深部に届いた。

「あひっ」

桜の木にしがみついたサチはもう動くな、というかのように腔洞をギュウギュウに締めてきた。

それは痛いほどの締めつけであり、動くに動けない。

物心ついたところから一緒にいて、いつか自分の嫁さんになるだろう、と無意識に思っていた女とついに繋がったのだ。なんとも感慨深い。

とりあえずサチの身を心配したオズマは、背後から覆いかぶさるようにして抱き締めると、右手を伸ばしてサチの涙に濡れた目元をそっと、指で拭ってやる。

「完全に入ったぞ。おまえのオマ○コの中に俺のちんぽがずっと突き刺さっている」
「うん……」

「痛いのか？」

気遣わしげなオズマの質問に、サチは素直に頷いた。

「うん……」

オズマの前で滅多に弱音を吐かないサチにしては、かなり正直な答えだ。

どうしたものか、と慌てるオズマに、辛そうに顔をしかめながらもサチは言い直す。

「でも、オズマのおちんちんがわたしの身体の中に入っていると思うと、凄く暖かい気持ちになる。なんか幸せな気分……」

「俺もだ。おまえのオマ○コの中に入ると、すげえ幸せな気分になる」

「嬉しい……♪」

サチの喜びを表してか、膣洞がはしゃいでいるかのよう動いてキュンキュンと締めつけてくる。

異物の侵入に慣れてきたのだろう。痛いほどの締めつけが収まった。

（うお、こいつのオマ○コの中、ザラザラだな）

まるで珊瑚で作られているかのような、ザラザラの贅肉に包まれてオズマは我慢できなくなった。

「サチ、動くぞ。すぐに終わらせる」

「オズマの好きなようにしていいよ」

昂たかぶるオズマの懇願に身を固くしながらも、サチは健気に応じる。

「ああ、痛みが我慢できなかつたら言うんだぞ」

「うん」

サチの身を気遣いながらも、オズマは腰をゆつくりと引いた。

ズルズルズル……。

ぬめった贅肉が、肉棒に絡みついてくる。特に雁かりのあたりへの刺激が凶悪だ。

（こ、これは……気持ちいい）

先にサチの口で果てていたことがオズマには幸いした。もし、それがなかつたら、あつというまにぶちまけていたところだ。

身も心も蕩けるような刺激に耐えながら引いた逸物が抜けきる直前に、再び押し込む。ズブズブズブ……と沈んでいき、最深部を捕らえた。

「はう」

再び子宮口を穿たれたサチは、小さな呻き声を上げてビクンと身体を震わせる。

オズマは再び腰を引き、また押し入れた。その繰り返しだ。

ズッコ、ズッコ、ズッコ……。

（これがサチのオマ○コか、なかなか具合がいいじゃないか）

もちろん、他の女の犯し心地など知らない。しかし、その小柄な身体が自分にはよく合っている気がした。

動きだしたら止まらない。オズマの腰使いは自然と素早く力強いものへと変化していった。

「はう、ふう、はう……」

サチは辛そうであったが、だんだんと慣れてきたようだ。可愛らしい喘ぎ声を漏らし始めた。

オズマのほうがたまらなくなる。

「サチっ！」

「ああ、オズマのおちんちん、ビクンビクンしている。わたしの中でビクンビクンしているの」

この半年間、フェラチオに明け暮れていた少女である。

初体験中とはいえ、逸物の仕組みはよくわかっているのだろう。男が何をしようとしているのか、察して身を固くする。

「ああ、中に出すぞ！ おまえのオマ○コの中に出すぞ！ いっぱい出すぞ！」

「うん、いっぱい出して！ オズマの子種欲しい！ わたしのオマ○コは、ううん、身体全部、オズマのものなんだから、遠慮しないでいっぱい出して！」

サチの懇願に、オズマの心が震える。その震えが逸物に伝播した。

（うわ、やっぱ可愛いぜサチ。すげえ、妊娠させたい）

そんな願望に支配されながらオズマは、逸物を最深部まで押し込み、子宮口でゼロ距離爆発をさせた。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュビュビュッ！

「はうううう」

初体験だというのに、野外で立ちバック。しかも、膣内射精までされてしまったサチは、桜の木に抱きついたらまま、身をプルプルと震わせていた。

「ふう」

心行くまで欲望を放ち。小さくなった逸物が、ヌルリと女体から零れ落ちた。

サチのほうは桜の木に抱きついたらまづルズルと沈み、大地に膝立ちになったところで、両手で股間を押さえる。



「……」

「その点で、ヒルデガルダとあたしの思惑は一致している」

男の腰の上で腰を振るう女の情熱にオズマは、気圧される。

「あなたのことが好き。あなたとサチの仲を完全に裂きたかった。だから、あの陰険女の提案に乗ったの！ あたしを見て、よく見て。サチにはなれないけど、サチとは違った、負けない魅力があたしにもあるでしょ！」

ぞくつ。

夏の青空を背に圧倒的な女体美を見せつけたブリギッドの気迫に、オズマは圧倒された。

それは心地よい敗北感である。

「……そうだな」

こんなに美人な恋人がいるのに、いつまでも昔の女に未練たらたらというのは、確かに失礼な話だ。

別れた女に未練を持つよりも、いまの女の美点を探すべきだろう。いくらでも美点はある。

「俺の恋人はおまえだ」

たとえいまは未練があっても、オズマがそう宣言したことにブリギッドは歓喜する。

腹をくくったオズマはブリギッドの尻を掴んで激しく突き上げる、それを受けてブリギッドもまた腰を振るう。

男女ともに鬼のように腰を使い、ブリギッドは悩乱する

「アン♪ アン♪ アン♪ いままでサチが飲んだ精液よりも、アン♪ あたしがいっぱい飲んであげる。アン♪ いままでサチのオマ○コの中に出した精液よりも、アン♪ あたしのオマ○コの中にたくさん出して。アン♪ 将来、子供だって、アン♪ わたしがいっぱい産んであげるからアン♪」

「……」

盛大に盛り上がるオズマとブリギッドの営みを、サチは羨ましそうに見る。

それと察したヒルデガルダは溜息をつく。

「そう、もの足りませんの。仕方ありませんね。あまりこのような無粋なものはいったくなくったのですが」

ヒルデガルダは椅子の下に手を入れて、何やら漁る。

そして、白蠟でできているかのような棒状の物体を取り出した。

「それは？」

瞬きをするサチに、白い物体を掲げたヒルデガルダは得々と説明する。

「サチさんも聞いたことぐらいあるでしょ。疑似男根。いわゆるパイプというやつですわね」

「っ！」

怯えるサチに、ヒルデガルダは優しく説明する。

「どお、あの野蛮人のものより美しくて大きくて立派でしょ。これをいまから入れて差し上げますわ」

「いや、それだけはイヤ」

涙目になったサチは必死に訴えるが、ヒルデガルダは首を横に振るう。

「怖がることはありませんわ、あむ」

双頭パイプの一端を口に含んだヒルデガルダは、唾液をたっぷりと塗りつけてから自らの下半身へと添える。

両手で持ち躊躇うことなく膣孔に押し込んだ。

ズブツ。

「あ、これはさすがに大きすぎましたわね。きつい。で、でも、サチさんをあの野蛮人の幻から解放するために、より大きなものは必要不可欠、あ、ああああ」

苦悶しながらもヒルデガルダは、極太疑似男根の一端を自らの膣内に挿入することに成功した。

男性経験がないような口ぶりだったのに、オズマとの体験のときに余裕だったのは、何度もこうやってパイプを挿入したことがあったからであろう。

「うふふ、いかがかしら？」

自らの股間から生えた生白い疑似男根をヒルデガルダは、愛しげに扱く。

色白でムチムチの女らしい女体美に恵まれたヒルデガルダの股間から白い疑似男根が生

えているさまは、滑稽なような気もするが、妙に似合う。

「さあ、あの男のことはわたくしがすっかり忘れさせて差し上げますわ」

舌舐めずりをしたヒルデガルダは、サチの両足首を持って押し倒すと、白き蛇頭の如き先端を、サチの股間に添えた。

「あ、いや……やっぱり……」

「大丈夫、すぐに慣れますわ。そして、男なんて必要ないのだ、ということをもって体感してくださいませ」

ズブ、ズブズブズブ……。

「ひい、ひいひいひい」

オズマの男根しか入れられたことのなかった少女は、凶悪極まる人工物を入れられて目を剥く。

「ひい、こ、これ凄い……」

同性に正常位で犯されたサチは、口はおろか、両目まで大きく開いて悶絶する。

「そうでしょう、そうでしょう。このパイプは、あの野獣のものより大きいですわよ」
瞳に狂気を宿らせたヒルデガルダは、嬉々として白い尻をグラウンドさせる。

「あひ、あひ、あひっ、太い、大きい、長い。奥が破られそう。子宮まで打ち貫かれちゃいそう」

「あはっ、サチさん、いい顔ですわ。もっと、もっと楽しんでくださいませ」

その光景に男を完全否定されてオズマも意地になる。

「ブリギッド。多少、乱暴になるが我慢してくれ」

上体を起こしたオズマは、両手を伸ばし、それぞれにブリギッドの太腿を持つと、立ち上がった。

「え、えええええ!!!」

ブリギッドは決して軽い女ではない。それを持ったままオズマは悠々と立ち上がってしまっただ。

背面の立位だ。

ブリギッドはM字開脚で、結合部をまる晒しにすることになる。

しかも、オズマはそのまま歩いて、サチとヒルデガルダのすぐ脇に立った。

「こ、これハズッ!」

さすがのブリギッドも、赤面した顔の口元を手で覆った。

「こうなれば、意地だ。こいつらに男のよさを見せつけてやる」

両腕でブリギッドの太腿を抱えたオズマは、ガツガツと逸物を突き上げてやる。

「あう、オズマ、凄すぎ、そんなに激しくされたら、あたし、あたし」

ブリギッドはたちまち狂乱する。

「オズマのちんちん、最高。あん、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」
打てば響く。

実に犯し甲斐のある淫乱の女である。

その光景を見せつけられたヒルデガルダは顔をしかめる。

「まったく、ただ太い棒を力任せに打ち込むだけだなんて、情緒も何もありませんわね。実はこれ、こういう使い方もできますのよ」

ヒルデガルダはそつと、女同士の結合部に指を入れて、わずかに見えている疑似男根に触れた。
ウィーン……。

甲高い音とともに女たちの体内から上がる。

「ひい、動く。お腹の中で動いている」

驚愕に目を剥いたサチの頬を、ヒルデガルダは優しく撫でる。

「このパイプは魔法具なのですわ。うふふ、男のおちんちんなんかこんな動きできないですよ。人類は日進月歩ですの。もう女にとって男なんて不要な生き物ですわ」

「はが、はひいいい」

強すぎる刺激に、サチは奥歯が合わさらないようだ。大口を開けて涎を噴いている。

「サチさん、あの野蛮人のおちんちんを入れられているときと、わたくしのこのパイプを入れられているとき、どっちが気持ちいいかしら？」

「そ、それは……」

サチはチラリとオズマの様子を見上げる。

そこには背面の立位で荒々しく犯されているブリギッドの痴態があった。

そのさまを悲しげに見たサチは、頷く。

「ヒルデガルダさんとのエッチのほうが気持ちいい……」

「そうでしょう。そうでしょうとも」

愛する女から満足する回答を引き出したヒルデガルダは、夢中になって腰をくねらせる。

「さあ、男相手では決して味わえない快楽に身を任せましょう」

「はううううう」

サチは我を忘れて、ヒルデガルダにしがみつく。

「うふふ、サチさんったら、本当に可愛い」

毒蛇のように薄く笑ったヒルデガルダは、サチの上に身を倒すと、互いの乳房を合わせ、乳首を擦りあわせる。

魔法の双頭バイブが勝手に動いてくれるから、無理して腰を使わなくとも、女たちは十分な快楽を得られるのだ。

「サチさん、最高ですわああああ」

いつもは気取った表情を崩さず、傲慢なまでにクールに振る舞っている女が、いまや見る影もない。

半開きの口から涎を噴き、目もだらしなく白目を剥く。

サチのほうも恥ずかしそうに頬を染めて、閉じた目から涙を滲ませている。

（相手が女つてというのが問題だが、好きな相手と繋がっているんだ。そりゃ、幸せだろうな）

女たちの戯れを見下ろしながら、オズマも負けずに、ブリギッドを犯しまくる。

（やば、この状況、かなり気持ちいい）

オズマはヒルデガルドに対して真剣な怒りを覚えている。

とはいえ、一発はやってしまった女だ。

その膣孔にぶち込んだときの、ミミズ千本型の気持ちよさを逸物が覚えている。巾着型のサチの膣孔に至っては論じるまでもなく、隅々まで逸物が覚えている。

この状態で、タコツボ型の吸引を誇るブリギッドの膣孔を犯しているのだ。

逸物はまるで三人の女を同時に犯しているような錯覚に陥り暴走する。

「そろそろ、いくぞ！」

「うん、きて！ きて！ きて！ あたしの中にいっぱいきてええ！」

「うおおおおおおお」

雄叫びとともに肉棒の中を熱い液体が駆け上がり、ブリギッドの最深部を打ち上げる。

「ひいひい、きた、きた、きちやつたあああああ」

ブシヤッ！

背面の立位でM字開脚にされていたブリギッドの股間から飛沫が舞った。

どうやら潮を噴いてしまったようだ。

霧状となつてサチやヒルデガルダの柔肌にかかる。

「はあ、オズマとあたしの身体つて、相性ピッタリだよね」

満足したブリギッドは首をひねつて接吻を求めてきたので、オズマはそれを受けた。

真横で余韻に浸るバカップルをヒルデガルダは嘲笑する。

「あら、もう終わりですよ」

それに対してブリギッドが応じる。

「ああ、気持ちよかつたぜ。オズマのぶつといチンポが、あたしのオマ○コの中でピクンピクンと痙攣して、熱くてヌルヌルの精液を、プシユプシユプシユとお腹いっぱいに注ぎ込まれる。これぞ女の幸せだよね」

「男にやられるのが楽しいだなんて、とんだ牝豚ですわ」

ヒルデガルダは愛しげに眼下で、惚けている少女の髪を撫でる。

「女同士には、野蛮な男のように射精などという無粋なものはありませんから、一日中時間が許す限り、いや永遠に、こうやって戯れられる。快樂も永遠ですわ」

その言動にオズマはさらに意地になる。

「ブリギッド、もう一発やろうぜ」

「もう絶倫なんだから。うふふ、でもいいわよ。あたしはあなたの彼女なんだし、あなたが満足するまで付き合つてあげる」

かくして、伯爵家のプライベートビーチでは、意地になった男と女。女と女がいつ果て



るともない快楽を貪った。

射精したばかりの逸物は、できたら触って欲しくないのだが、ヒルデガルダの好きにさせた。

射精したばかりの逸物とはいえ、痴情に狂える美少女に夢中になって舐めしゃぶられていたら、すぐに復活してしまう。

「うふふ、また大きくなった。なぜかしら？ さつきもうお腹いっぱいと思ったのに、時間が経つとすぐにまた入れてもらいたくなってくる」

恍惚としたヒルデガルダは、右手で逸物をしゃぶりながらシゴキ、左手でオナニーしている。

そこに思いがけない声が浴びせられた。

「何やっているんですかっ!!」

その声をオズマが聞き間違えるはずがない。

「サチ、なんでここに？」

驚くオズマに、ポニーテールを振り乱しつつサチは叫ぶ。

「オズマがヒルデガルダさんのところに出かけたというから、なんか大変なことになっているかと思って追いかけてきたの。二人は少し出かけているからって応接間で、ブリギツドさんと二人ずつと待たされていたのよ。でも、そんなことより、ヒルデガルダさん、それ絶対に自分から啜えていますわよね。男嫌いだって言っていたのに、オズマのおちんちんをすつごく美味しそうにしゃぶってますよね！」

自分を無理やり同性愛に誘った相手が、思いつきり男に転んでいる姿を見れば、いかに大人しいサチといえども、激昂する。

「サチさん……」

男の股間から顔を上げたヒルデガルダも、さすがにばつが悪そうだ。

仕方ないのでオズマが答える。

「いや、これはその、おまえをこいつから解放しようと思つてだな、その……男のよさを教えてやろうとしたら、ちよつとお灸が効きすぎたというか……」

ヒルデガルダはおずおずと口を開く。

「サチさんごめんなさい。わたくしとはもう別れてください。わたくし、もうオズマ、ご主人様の性奴隷になり下がってしまった。この極太おちんちんでなくては、もう満足できませんの」

「ヒルデガルダさん？」

いつもと反転した親友の言動に、サチは面食らう。

ヒルデガルダは逸物に頼ずりしながらうつとりと答える。

「シャルロット姫がなぜ漁師とかげ落ちしたか、ようやく理解できましたわ。海の男のおちんちんは凄すぎます。わたくし、生涯このおちんちんに奉仕しますわ」

「ダメ——！ オズマのお嫁さんはわたしがなるの」

サチの絶叫に、オズマは驚く。

「サチ、おまえ」

「っ」

ハッとしたサチは口を手で押さえる。

そのさまに一人、ヒルデガルダは頷く。

「そうね。ご主人様には先約があるのよね。いいわ、わたくしは二号さんで。サチさんともどもよろしくお願いいたします」

「え、いや、でも、わたし……オズマとは別れたし……」

モジモジしているサチに、ヒルデガルダは手招きする。

「いいのよ。サチさんがずっとご主人様のことを好きだっことはわかっていたし、わたしもご主人様が好きになったから、二人でともにご主人様のものになりましょう」

「……」

サチは恨めしげな顔で、オズマの顔を睨んでくる。

コンコン。

サチの後ろで扉がノックされる音がした。

何事かと思つて視線を向ければ、扉は開けられたままになつており、その傍らに背の高い女が、裏拳で軽くノックした姿勢で立っている。

「あのく盛り上がっているところ、悪いけど。オズマのいまの彼女はあたしなのよ。あんたたちなに他人の彼氏を取りあつているのかな？」

サチに続いてのブリギッドの登場にオズマは焦った。

あの侍女のお姉さんの企みだろう。たぶん、修羅場を作って楽しんでるのだ。

「こ、これは……、その……なんだ」

言い訳ができないオズマを、ブリギッドはみなまで言うな、と言いたげに手で制すると歩み寄ってきた。

「あたしは海の男に浮気するな、なんて心の狭いことは言わないわよ。港ごとに女がいるのは甲斐性ってもんよね」

そう言いながら服を脱ぎ始めた。そして、素っ裸になると、ヒルデガルダと並んで、オズマの前に跪き、逸物を奪った。

「ヒルデガルダ、あんたは女同士の愛こそ至上だったんじゃないの？」

「ふっ、ミレイお姉様も男に走りましたし、わたくしも男のよさに目覚めましたわ」

「ふん、まあいいか。オズマなら二、三人の女なら苦もなくさばけると思うし」

ヒルデガルダとブリギッドは互いに逸物に手をかけて睨みあっていたが、やがて競いあうように舐め始めた。

「さあ、サチさんも。もうオズマをレイプ犯として放校するなんて言わないから、こっちにきて一緒に楽しみましょう」

「おまえそんなことを言って、サチを操っていたのかよ。それで愛しあっていたなんてよく言えたものだな」

ブリギッドは呆れ顔で毒づく。

寝台の縁に座ったオズマの右太腿からブリギッド、左太腿からヒルデガルダが首を伸ばし、逸物を舐めてくる。

中央はサチのために空けてくれたようだ。

「うふふ、はじめはグロテスクに見えるのに、慣れてくると凄く可愛いものね」

「まあね。男の急所を意のままにできるといえるのは、女の特権だからね」

ヒルデガルダとブリギッドは、亀頭部の左右に舌を這わせてくる。

（くっ、二人かがりというのはなかなか気持ちいい。しかし、サチを前にあまりだらしない顔をするわけには……）

オズマはサチに未練がある。サチも自分に未練があるというのは、さっきの一言でわかった。

ようは現在、嫉妬して、意地になっっているのだろう。

そのサチをどう口説いたものか、オズマは頭を悩ます。

「いや、その……サチ、こういう格好のときに言うのもなんだけど、俺たち……」

よりを戻さないか、と言おうとした矢先に、サチは早口でまくしたてる。

「オズマは、カイトさんを尊敬していたものね。真似て、女をいっぱい侍らせたいなんて思っていたんじゃないの。カイトさんには及ばないけど、二人も恋人できてよかったね」

「いや、だから、その……俺は、サチにも舐めて欲しい！」

オズマは思いきって叫んだ。

「サチのフェラチオは絶品だ。サチほどフェラチオの上手い女はいない。こいつらただ舐めているだけで、急所とかわかってない。サチのほうが断然上手い。だから、サチに舐めて欲しいんだ」

「へえ、そういうこと言っちゃうんだ」

逸物を手に取っているブリギッドがジロリと睨んできた。

「ごめん、と目で謝る。」

「……」

サチがどういう反応をするか、みんなが固唾を飲んで見守っていると、サチは諦めたように溜息をついた。

「もう、オズマはしょうがないな。エッチなんだから……」

サチがいそいそと服を脱ぎだしたことに、ブリギッドは呆れる。

「ウソ、あんな口説き文句で堕ちた」

それをヒルデガルダが補足する。

「そりゃ、元々ご主人様にべた惚れな娘ですもの。よりを戻すきっかけが欲しくて仕方なかったのよ。ほんと可愛いわ♪」

男に目覚めたヒルデガルダだが、サチへの愛はいささかも変わっていないようである。

「それじゃ、久しぶりに舐めてあげる」

オズマの股の間に屈み込んだサチは、満面の笑みで裏筋を舐め上げてきた。

「あたしも負けないわよ」

「サチさんの技を盗ませていただきますわ」

右側からブリギッド、左側からヒルデガルダ。そして、裏筋にサチの舌が絡みついてくる。

「うおお」

さすがはサチ。オズマの急所はよく心得ている。

巧みに感じさせて、しかし、絶頂には導かない。

その熟練の技には、ブリギッドも瞠目したようだ。しかし、それでは終わらないのが、ブリギッドという女である。

「さっちゃん、確かにフェラチオはあんたのほうが上手いわね。でも、肉体なら負けてないって自負しているのよね。あたし♪」

そう嘯いたブリギッドは、両手で自らの前方飛び出し型の乳房を持ち上げてみせていた。

「なるほど、パイズリですわね。面白いですわ」

ヒルデガルダもまた、自らの肉まん型の乳房を持ち上げてきた。

「わ、わたしだって負けません」

二人に比べるといささか小ぶりだが、形のいい乳房をサチは持ち上げる。

「お、おまえら……」

三方から迫る合計六つの乳房。それを見下ろして、オズマは期待に生唾を飲む。

「それええええ!!!」

ブリギッドのかけ声とともに、一斉に乳房が押し寄せてきた。

一本の逸物に弾力のある乳房と、ふわふわの乳房と、いささか硬い乳房が押し寄せてきて包み込む。

(こ、これはすげえ……)

女の象徴である乳房。それが女の意地をかけて押しくらまんじゅうをしているのだ。

その狭間で逸物はひたすらもみくちゃにされている。

かつてない快感と、視覚効果で男はたちまち追い詰められていった。

「どお、あたしのおっぱい♪ 最高でしょ?」

ブリギッドが明るく笑う。

「ああん、これ、乳首が擦れて、凄い」

ヒルデガルドが色っぽく喘ぐ。

「あ、オズマのおちんちん、爆発しそう」

オズマの限界をサチはすかさず察した。オズマの逸物のことは、ある意味、オズマ本人よりも詳しい娘である。

オズマはこの至福の一時を少しでも長く味わおうと、頑張ったのだが、三種類六つの乳房責めは、男の理性で対抗できるような生易しいものではなかった。

睾丸から溢れ出した熱い血潮が、いつきに肉棒を駆け上がっていく。

「うおおおおお!!!」

ドビュビュビュ——!!!

未知の快感に翻弄された逸物は、盛大に爆発した。

白濁液が舞い上がり、黒い頭髪と栗毛の頭髪とオレンジ色の頭髪を染め上げ、褐色の肌、白い肌、乳白色の肌に浴びせられる。

思う存分に射精したオズマは、そのまま寝台に仰向けに倒れた。

「どうだった？」

ブリギッドの質問に、オズマは一言で答える。

「最高」

「よかった。つてキャ♪ あんたはレズを卒業したんじゃないのか」

「だって美味しそうなんですもの」

ヒルデガルドが、他の二人の乳房に顔を埋めて、ペロペロと白濁液を舐めている。

「やったわね」

「ヒルデガルドさんのおっぱいを舐めてあげます」

寝台に仰向けになっっているオズマの足下では、三人の美少女たちが互いの乳房に顔を埋めて、キャッキャツと言いながら舐めしゃぶっている。

乳房を綺麗にした三人の女たちが、いそいそと寝台に上がってきた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは、全巻の方向性でござります。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

二次元ドリーム文庫269

ハーレムヴィーナス

【電子書籍版】

著 者

竹内けん

装 丁

マイクロハウス

発 行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F

●編集部 TEL.03-3551-6147/FAX.03-3551-6146

●販売部 TEL.03-3555-3431/FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Ken Takeuti 2013

当ファイルは、二次元ドリーム文庫「ハーレムヴィーナス」
(2013年8月22日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>